

比較の非理と悲哀

山 田 安 彦

比較は社会科学に限らず、一般に科学の研究にとって重要な方法概念の一つである。ここでは不遜なことをいうようであるが、これは筆者への戒めであることを冒頭に申しおきたい。

一般に、比較という言葉も、また方法にしても安易に使い過ぎるのではなかろうか。

そもそも比較ということは、二者、あるいはそれ以上のもの共通性と相異性を把握することである。したがって、比較には不可欠の規範が存在する。それには2つある。その一つは比較するための目的であり、しかもその意義を明確にしておくことを忘れてはならない。もう一つは比較するための基準尺度である。

如上は比較の一般的規範であるが、地理学、特に歴史地理学では比較の基底に対比ということも考慮しておく必要が生ずる。

対比するということは基盤が同じでないと不可能である。つまり、レベルが同じでないと対比はナンセンスになる。したがって、歴史地理学でしばしば主張される地域の時間的比較は理論的に困難である。何故なら、時代が異なれば地域構成要素の質も量も異なり、その構成要素の組み合わせ方や結合方法も違い、さらには地域形成の主導要素も変化する。それらを総合して端的に言えば、時代が違えば、地域のカテゴリも異なるので、カテゴリの異なるものを対比するということは不可能であるということになる。

かように考えれば、過去の地域と現在のそれを対比することは理論的には不能であるが、対比するのではなくて、過去から現在への変化発達の過程を把握することに観点をおく。それによって、地域構成要素の質と量の変化や改造、またそれに生ずるそれらの構成要素の組織体系の変容や規模的变化なども理解しておけば、地域の比較を許容せざるをえないであろう。

さて、比較によって把握しうるものは、共通性と相異性のみであって、そのなかからそのものの特異性なり、特徴性を見出そうとすることは不可能に近い。比較は比較する目的とその意義によって、その指標を選択しなければならない。仮に、能う限りの指標を取り上げて比較を試みたとしても、あくまで共通性と相異性しか把握しえないのである。その相異性を特異性といい特徴性というならばそれでもよい。唯、正確に言えば、もし特徴性を指摘しようとするのならば、ややもすれば、主観が介入するのではあるまいか。そうすると、科学で最も尊重すべき客観性が崩れることになる。したがって現在の科学では主観の客観的表現が要求される時期が到来しているのではなかろうか。

なお、比較から最尤の特徴を抽出しようとする余りに、無意識のうちに主観が介入し、地域最良になったり、国家最良になったりする恐れはないか。延いては国粹主義が抬頭してきはしないかを恐れる。この点を杞憂する。比較には如上の規範を十分に考慮しないと理ならずということになる。

もう一つ比較で憂慮すべきことがある。それは比較によって格差の認識が生ずる。その格差を十分に分析しないと、唯、皮相的にのみ考えるならば、日常生活のなかで、自分の生活の戒めにしたり、諦観したり、甚しきは幸、不孝を判断したりする。これこそ実に浅薄で、無意義で、品性のないものはない。ここに人間としての悲哀を感じるのである。

今日、存在する地域の格差を如何に解釈し、取り扱うか、または解消するかは地理学に課せられた大きな現在の課題の一つであろう。与えられた紙数を費したので、別の機会にまた別の観点から論じ、御教示を乞う次第である。

(千葉大学)